

平成 30 年 6 月 26 日現在

機関番号：41201

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2017

課題番号：26820276

研究課題名(和文) 宮廷女房日記にみる中世前期寝殿造の復原的研究 王朝文化の変容と空間演出を視点に

研究課題名(英文) restorative study of early medieval palace buildings from the perspective of a court lady's diary: transformations in dynastic culture and scenography

研究代表者

赤澤 真理 (Akazawa, Mari)

岩手県立大学盛岡短期大学部・その他部局等・講師

研究者番号：60509032

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、11世紀から13世紀頃の内裏・院御所・公家住宅を、宮廷女房日記を史料に、行事時の使い方を検討するもので、女性の空間を演出する打出(女房装束を几帳に架け、几帳帷子を中央に、2具の袖口と裾を御簾の下から出だす)の解明を目指した。打出は、女性の御所を示す演出で、女院や後に侍る女房が出だす、儀式の途中で女院の座を創るために出だす例がある。儀式空間に設置される例では、寝殿の東あるいは西の二～三ヶ間、北面の東あるいは西の渡殿や二棟廊に向けて置き、儀式会場や上位の方角を示した。打出の消失は、室町時代頃からみられ、歌合等の男女が共有する行事がなくなり、儀礼空間に女房の存在が失われたためと考えられる。

研究成果の概要(英文)：This study examines the diary of a court wife in order to explore uchide performances in women's spaces within the inner (emperor's) and exterior (retired emperor's) imperial palaces and the homes of nobility from the 11th to the 13th centuries. Through this, the study analyzes the use of uchide performances at ceremonial events. "Uchide performances" refers to a practice in court circles whereby female palace attire was ceremonially positioned behind the screen (partitioning women's quarters from their surroundings), and, with the kimono arranged behind the screen in the center, the cuffs and hems of women's garments were displayed protruding underneath the screen]. Such performances portray the feminine side of imperial palaces and there are examples of court ladies waiting upon ranking imperial women, making a place for imperial princesses, etc. in ceremonies.

研究分野：日本建築史

キーワード：寝殿造 打出 几帳 女房 女院 物語絵 しつらい 宮廷

1. 研究開始当初の背景

古代寝殿造は、貴族社会の儀式空間として、あるいは、妻問婚等の家族形態により、その特質や変容過程が明らかにされてきた。近年の建築史研究においては、貴族が記した古記録を基にした儀式空間の解明に重点が置かれてきた。いっぽう、『源氏物語』などの王朝文化の舞台となった后や内親王、女房の生活空間に関する研究は少ない。本研究はこれまで建築史研究の史料として、正面から扱われてこなかった中世における宮廷女房日記を基礎に、男性貴族が参入できなかった御簾内の后・内親王と女房が生活した空間の実像を究明することを目指した。

2. 研究の目的

本研究は、11世紀から13世紀頃における内裏・院御所・公家住宅を、宮廷女房日記を基礎史料に、古記録・指図・絵巻を照合し、行事の空間及び居住空間における使い方を検討することを目的とする。具体的には、寝殿造空間における女性の空間を演出する打出の実態の解明を目指した。

3. 研究の方法

打出とは、女房装束を几帳に架け、几帳帷子を中央に、2具の袖口と袂を御簾の下から出す装束である。本研究では、宮廷女房日記を中心に、物語・古記録から打出が設置された場所や性格を検討した。

前年度までの研究課題（平成25年～26年度研究活動スタート支援24860064）において、平安時代の歌合の際に、女房歌人は御簾から和歌を歌絵に意匠化した装束を出し、自らの座を御簾の外の公卿・殿上人・楽人等に示すことがあった。そこで、行事時の女性の座所の実態を検討するため、打出に着目した。本研究の手順と成果を以下にまとめる。

(1) 平安時代後期から南北朝時代頃の女房が記した日記を通読し、建築・生活・調度の記

述を抽出した（『紫式部日記』『讃岐典侍日記』『たまきはる』『弁内侍日記』『とはずがたり』『竹向きが記』）。

(2) 宮廷文化を主題とした、中・近世における絵巻について、実見調査をした。国内では、「駒競行幸絵巻」（和泉市久保総美術館蔵）、「補定駒競行幸絵巻」（東京国立博物館所蔵）、「朝儀図屏風」（茶道資料館蔵・徳川美術館蔵）、源氏物語絵等（根津美術館蔵、茶道資料館蔵、徳川美術館蔵、国文学研究資料館等）の調査を推進した。海外では、北米を中心に、ミネアポリス美術館、インディアナポリス美術館、クリーブランド美術館、フリアギャラリー、ハーバード大学美術館、メトロポリタン美術館等において、物語絵・行事絵巻の調査を実施した。

(3) 平安時代中期から鎌倉時代頃の物語文学において、「打出」や「居なみたる」「おしこりて」等の女房の空間の記述を抽出した。ジャパンレッジのデータベースを活用するとともに、新古典文学大系を通読した。

(4) 平安時代後期から鎌倉時代頃の古記録において、「打出」の記述を抽出した。東京大学史料編纂所等のデータベースを活用するとともに、大日本古記録、史料大成等を精読した。古記録に示された打出は、11世紀後半から12世紀前半の『中右記』（藤原宗忠）から用例が増加する。さらに、『長秋記』『兵範記』『公衡公記』『花園天皇宸記』等の古記録所収の指図から打出の場所を特定した。

(5) 「女房装束打出押出之事」（宮内庁書陵部蔵、鷹司家伝来）「女房装束打出並車衣之事」（東北大学狩野文庫蔵）等の打出に関する有職故実書を調査・翻刻し、研究の史料とした。

4. 研究成果

打出の実態を、女房日記、古記録・指図、絵巻、近世の有職故実書等から検討した結果、以下の点が明らかとなった。

(1) 打出の用法

打出は、寝殿造における行事において、御簾の内から女性の装束を出し、室内に女性が座っているかのように見せる演出である。

打出の用法を、史料の検討から、以下の点を抽出した。

- ①妻戸に設置する（使者のための明示など）、
- ②儀礼の空間を装飾する（女性が着座する事例、着座しない事例がある）
- ③日常的な生活や遊興の場で、女性の座を示す。絵巻等では、外部の簀子や庭に向かって装飾された打出が表現されることが多いが、母屋に置かれ、廂に向かって出される事例もある。

(2) 打出の内部空間

打出は、御簾の内側に几帳を立て、柱間1間に二人ずつの女房が向かい合わせとなって座っていることが多い。『たまきはる』や『とはずがたり』には、打出の前に着座し、庭で催されている雅楽が見えなかったこと、女院の賀宴には、縁のある女性が打出役として参加したことなどが記される。打出の女房は、廂におしかたまって居並んでいる。その中を、天皇や藤原氏の男性貴族が参入することがあった。

(3) 打出の意匠

複数の女主人が行事に参加した場合には、女主人に仕える女房が競い合うかのように、打出を演出した。例えば、『兵範記』仁平2年（1152）3月7日条鳥羽天皇五十算賀における女房達の打出は、四色に限定しながらも、一人ひとりがすこしずつ色彩が異なるなどの院政期の趣向がみられる。女院・齋院・姫宮に仕える女房達が競い合うかのように打出をした。出産儀礼の際には白で統一された。

(4) 打出の場所

12世紀から14世紀における古記録所収の指図に示された打出を検討した。儀式空間に設置される例では、寝殿の東あるいは西の2～3ヶ間、北面の東あるいは西の渡殿や二棟

廊に向けて置く事例が確認できる。東礼か西礼かで、打出の場所が逆転しているため、打出は、各寝殿造邸宅における儀式の上位の方向を示す役割が窺われる。

(5) 女性座としての意味

打出は、12世紀頃からの儀式の際に、内部に女性が座らなくなる。しかし、依然として、女性の座の意味を有していた。親王誕生の五十日においては、母後の座を示す際に打出が出され、天皇座の際に引き入れている（『山槐記』『公衡公記』）。

(6) 打出の終焉

打出は、管見の限りでは、足利将軍義持・義教・義政の拝賀まで継承されている。打出の消失要因には、①跳ね上げの格子が、引き違いの建具となること、②しつらいの固定化・建築化、③歌合などの男女が共に共有する行事が失われ、私的な儀礼空間に女房の存在が示されなくなることがあげられる。

今後は、12世紀から16世紀頃古記録を通観することで、打出を女性の座とする意味がいかに関承され、あるいは変容したのかを明確にする。

さらに、宮廷女房日記を基礎に、中世における各天皇・院、后・女院の邸宅の中での儀式と生活に着目することで、寝殿造空間の変容の実態を明らかにしていきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 5 件）

赤澤真理・伊永陽子・森田直美「宮内庁書陵部蔵『源氏類聚抄』(1)桐壺 翻刻・解題」総合文化研究所紀要 32、同志社女子大学 pp. 181-150。平成 27 年 9 月

赤澤真理・伊永陽子・田村隆・森田直美「宮内庁書陵部蔵『源氏類聚抄』(2)箒木 翻刻・解題」総合文化研究所紀要 33、同志社女子大学、pp. 240-217、平成 28 年 9 月

赤澤真理「建築空間の境界と打出の装束—
附・宮内庁書陵部蔵「女房装束打出押出事」」
国文学研究資料館紀要、38号 pp. 275-320、
平成30年3月

赤澤真理「建築史の中の『源氏物語』—同時
代の住宅像と考証学のあいだ—」比較日本学
教育研究部門研究年報 第14号、お茶の水女
子大学大学院人間文化研究科国際日本学専
攻編、pp15~25、平成30年3月

Mari Akazawa

The Borders of Shindenzukuri: “Inside”
and “Outside” as Staged by Uchi’ ide
Studies in Japanese Literature and Culture
Borders、2018、7

[学会発表] (計 13 件)

赤澤真理「女房装束の打出による寝殿造の空
間演出とその性格」国際服飾学会、(同志社
女子大学)、平成26年10月

赤澤真理「平安時代の貴族邸宅における遊興
空間」平安京京都研究集会
「平安時代貴族邸宅論」(京都産業大学)
平成26年11月

赤澤真理「平安貴族の住宅建築と生活様式」
(三重県立斎宮歴史博物館歴史講座)、平成
27年6月

赤澤真理「日本中世における空間の境界—身
分・性差から—」人間文化研究機構 国文学
研究資料館 国際共同研究 境界をめぐる
文学—知のプラットフォーム構築をめざし
て—、(国文学研究資料館)、平成27年7
月

赤澤真理「物語絵巻に描かれた王朝の住文

化」平成27年度府民教養講座(大阪府立大
学)、平成27年6月

赤澤真理「女房装束の打出により演出される
寝殿造の内と外」日本建築学会近畿支部建築
史部会第2回研究会、(大阪科学技術センタ
ー)、平成28年11月

赤澤真理「伊勢物語絵に描かれた建築空間—
住吉如慶にみる復古表現と同時代表現—」
ポーラ美術振興財団助成事業 国際シンポジ
ウム2016『絵入り本と日本文化』(絵入本ワ
ークショップIX)、(東洋文庫)、平成28
年12月

赤澤真理「寝殿造の儀礼空間における女性の
居所とその境界—王朝文学から中世宮廷女
房日記まで—」平安京の〈居住と住宅〉研究
会、(京都大学)、平成29年3月

赤澤真理「王朝文化と寝殿造—宮廷女房日記
のなかの住空間像とその変容—」第7回「知
の試み研究会(山崎塾)、(サントリー文化
財団)、平成29年5月

赤澤真理「建築史の中の『源氏物語』—同時
代の住宅像と考証学のあいだ—」第19回
国際日本学シンポジウム「文化史上の源氏物
語」お茶の水女子大学 グローバルリーダ
ーシップ研究所比較日本学教育研究部門(お
茶の水女子大学)、平成29年7月

赤澤真理「住吉具慶筆「源氏物語絵巻」(MIHO
MUSEUM 蔵)にみる建築表現の復古とその意
味」第1回源氏絵データベース研究会(東
京工業大学)、平成29年8月

赤澤真理・千葉映穂・宮彩香「明治41年盛
岡巡啓における南部家別邸の空間構成とし
つらい」日本建築学会大会学術講演梗概集

pp. 227-228、(広島工業大学)、平成 29 年
9 月

赤澤真理「女房装束打出并押出之事」(宮内
庁書陵部蔵)について」平安京の居住と住宅
研究会(京都アスニー)、平成 30 年 3 月

[図書] (計 1 件)

赤澤真理「近世源氏物語絵に示された王朝の
世界一住吉具慶筆「源氏物語絵巻」(MIHO
MUSEUM 蔵)にみる貴族住宅・洛外・遊興の表
現を通して—(『空間史学叢書 2—装飾の地
層—』)」岩田書院、pp. 221~262、平成 27
年 3 月

6. 研究組織

(1) 研究代表者

赤澤 真理 (AKAZAWA Mari)

岩手県立大学盛岡短期大学部・講師

研究者番号：60509032

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし